

巻頭言

杏林大学保健学部 臨床検査技術学科
臨床検査学領域 宮澤 博

研究室にはたぶん女神がいると思う。なぜそう思うのか。石器時代の話しなのはお許し願いたい。昔、風疹の診断に役立つIgM capture法（当時は新しかった）を検討したとき、思いのほか良い結果が出たので、気を良くしてそれではと学会発表の要旨を提出。あとはデータの確認とスライドの用の写真の準備をすれば良いと高を括った。

ところが、その後何度再試験しても先日までのきれいな結果を再現出来ない。「先輩から3回同じ結果が出るかを確認することが大事だ、基本だ」と教わった。それを飛ばした罰だと素直に思ったが、いまはそれどころではない。見落としている何かを探るべく、すべての手順を見直すが、事態は一向に改善の兆しが無い。いよいよ発表取りやめがちらつく。

行き詰まってこれが最後と決めての実験は、残酷にも途中で期待はずれとわかる。もう、どうにでもなれとプレートをミキサーで混ぜて机の上に放置。30分後、何気なくのぞいてみると、なんとそこにあったのは思い描いていた結果。

たぶん、「この辺で許してやるか」と女神が微笑んだのでしょ。今度は再現性をしっかりと確認し、学会では何事もなかったかのように発表。ただ、コツは再度ミキシングするところにあると添えた。驚いたのは、この再度ミキシングに注目された先生がおられたこと。また、発表から10年以上後に、IgM captureを初めてやったことをその道の大家に言われたのにも恐縮した。

見ている人は見ている。

こんな苦い思いをした後も、懲りずに小さなステップを飛ばして前に進もうとすると、思ったように進めなくなる事が多々あり、女神に「ちゃんとやりなさいよ」と言われたと感じる。

研究はハッキリや思い込みではなく着実に小さなデータを積み上げることが、真実の高みに行く唯一の道。しっかりと裏付けされた新規性のある発見は、正しく評価され息が長い。数も大切だけれど、あっという間に廃れ、忘れ去られる事がいかに多いことか。

学生には、うまくいった実験には慎重になりなさい、しっかり再現性を確認しなさい、そして最も大切なことは嘘のないことだと伝えています。